

天声人語

何度読んでも、言葉が突き刺さってくる。『コレガ人間ナノデスノ原子爆弾ニ依ル変化ヲゴラン下サイ』。そんな訴えから始まる原民喜の詩「原爆小景」である。1945年8月6日、故郷の広島に疎開していたときに、原は被爆した▼『肉体ガ恐ロシク膨脹シノモ女モスペテ一ツノ型ニカヘル……爛レタ顔ノムクンダ唇カラ洩レテ来ル声ハノ「助ケテ下サイ」ト 力細イ 静力ナ言葉』。人間とは絶対に相いれない破壊兵器への怒りである▼詩で、小説で、そして数多くの証言で。長きにわたり被爆者の手で、破壊の現実が伝えられてきた。それを世界へ広めたのが核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）だった。世代も国境も超えた市民の運動が、ノーベル平和賞に決まつた▼核を違法とする核兵器禁止条約が採択されたのは、被爆者の声が人々に届いた証拠であろう。「死が苦しみから解放してくれるまでの間、消え入る声で水を求めていた」。カナダ在住の被爆者サーコー節子さんが4歳のおりについて語っていた▼核兵器にあらがう動きには、これまで幾つもの平和賞が贈られてきた。それでも、核は必要悪だとする認識は冷戦後も続く。米国が圧倒的な核兵器を持ち、北朝鮮が割って入ろうとする現状がある。72年かけてたどり着いた禁止条約なのに、原爆を落とした国も落とされた国も批准しようとした火を人間が消していく。その道筋を示した禁止条約であり、平和賞である。

2017・10・7